

# モノスにおける実質動詞用法と補助動詞用法の歴史的変化

## The Historical Transition of “mono-su”, Focusing on Its Usages as a substantial verb and a subsidiary verb.

余 飛洋  
YU FEIYANG

### 摘要

It is known that the ancient Japanese verb “mono-su” can be used as a substantial verb and a subsidiary verb. From the Heian Period to the Muromachi Period, mono-su was frequently used as a substantial verb. During the Edo Period, the frequency of “mono-su” as a substantial verb increased so rapidly that only the substantial verb usage remained after the Meiji Period. The substantialization of “mono-su” and its tendency of having volitional meaning as a transitive verb led to the fewer cases of the subsidiary verb usage of “mono-su”. From the Heian Period to the Muromachi Period, “mono-su” was used to describe people’s existence, movement or object’s existence, it shows the maintaining of actions and situations. From the Edo Period, there was a sharp increase in the cases that “mono-su” was used to describe the visible changes due to some actions to a concrete object, and “mono-su” became used only in such cases. The literary style also influenced this change.

キーワード：モノス 代動詞 実質動詞 補助動詞 意志動詞

Keywords: "mono-su" pro-verb substantial verb subsidiary verb volitional verb

### 1. はじめに

古代日本語の動詞モノスには、実質動詞用法と補助動詞用法の二つの用法があることが知られている。実質動詞用法は、(1)のような、存在の「いる・ある」、移動の「行く・来る」、または「食べる」「書く」「言う」など、具体的な、様々な動詞の代用として使用されるものである。補助動詞用法は、(2)のような、具体的な意味を持っていない、前接する動詞・形容詞などの用言連用句に付いて補助的に用いられるものである。

(1) 「文ものすれど、返りごともなく、…」などぞあめる。 (蜻蛉日記/中・200 頁)

(2) (源氏)「(略)前齋宮のおとなびものしたまふをだにこそあながちに扱ひきこゆめれば、…」など、 (源氏物語/薄雲・428 頁)

この二つの用法は、先行研究において、どちらも中古の仮名文学で多用されるとの指摘がある。しかし、中世以降の使用状況については、先行研究では論じられておらず、明らかになっていない。本稿は先行研究を踏まえつつ、モノスに関する実質動詞用法と補助動詞用法の相互関係に着目し、モノスの歴史的変化について記述する。

## 2. 先行研究<sup>i</sup>

### 2. 1. 東辻(1960)

東辻(1960)は、モノスの実質動詞用法と補助動詞用法についての意味用法を判断する基準として、以下のように述べている(東辻(1960)、p. 29)。

- ①実質動詞として：「ものす」の意義の具体的規定関係にある、特定の語句が存在する。
- ②補助動詞として：(イ)「ものす」が実質動詞の連用形に下接して、あたかも複合動詞のようになっている。(ロ)「ものす」が属性を表わす語もしくは句〈形容詞・形容動詞等 及びそれに否定語の加わった句〉の連用形に、直接もしくは助詞「て」を介して接している。(ハ)指定の助動詞に下接している。

### 2. 2. 中村(1995)

中村(1995)は、『源氏物語』の地の文における「ものし給ふ」の補助動詞用法について、まとめとして以下の8種類を挙げる。

- ①断定助動詞「に」(係・副助詞介在)+ものし給ふ
- ②形容詞+ものし給ふ
- ③形容動詞+ものし給ふ
- ④補助活用型助動詞(「べし」「ず」「やうなり」など)+ものし給ふ
- ⑤断定助動詞「に」・形容詞・形容動詞・助動詞「やうなり」(助詞「て」介在)+ものし給ふ
- ⑥動詞連用形(助詞「て」介在、係・副助詞介在)+ものし給ふ
- ⑦動詞連用形(助詞「つつ」介在)+ものし給ふ
- ⑧副詞「はなばなど」+ものし給ふ

### 2. 3. 近藤(1995)

モノスの実質動詞用法に関する研究に、近藤(1995)がある。近藤(1995)は、中古の和文作品におけるモノスがどのような動詞の代用として用いられているかについて観察した。その結果、動詞「あり」<sup>ii</sup>の代用の用例数が最も多く、61.5%を占めているという。動詞「行く」「来」といった移動の動作を表す動詞の代用は19.8%であり、それ以外のモノス(「言う」「する」「食べる」など)は18.7%であると述べている。

### 2. 4. 呉(2019)

呉(2019)は、東辻(1960)によるモノスの補助動詞用法(イ)の場合について精査し、下位分類を立てた論考である。東辻(1960)は、補助動詞用法(イ)では「あたかも複合動詞のようになっている」と述べているが、呉(2019)は、後項のモノスは、補助動詞である場合も、複合動詞の後項である場合もあるとする。

呉(2019)では、『源氏物語』においてモノスに前接する動詞とその動詞が複合する形式を調査し、四グループに分けてそれぞれを検討した。

グループⅠ：移動動詞「来」「行く」だけに前接する動詞

グループⅡ：「ゐる」だけに前接する動詞

グループⅢ：「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞

グループⅣ：通常語形のない動詞

結論として、モノスがグループⅠの動詞に後接する場合には、動作主の移動の動作があり、「-来」「-行く」の敬語形だと考えられるという。グループⅡの場合には、動作主が動作をした後にじっとしており、モノスは「-ゐる」の敬語形と考えられるという。グループⅢの場合、動作主が移動しているかじっとしているかにより分けられるとする。グループⅣの場合には、動作主に移動の動作があれば、モノスが「-来」「-行く」の敬語形と考えられ、動作主が動かず、じっとしている場合であれば、モノスは「-ゐる」の敬語形であるとする。また、グループⅣの場合、動作主が動作した後、動作主の移動の動作もなく、「じっとしている」とも解釈できない場合には、動作の持続を表し、補助動詞と考えられるという。

## 2. 5. 先行研究のまとめと問題設定

先行研究は、いずれも中古を中心とした研究である。モノスに実質動詞と補助動詞の2区分が提案されており、その判定の基準は、中世以降のモノスがどのように変化していくかを観察する上でも指標となる。

しかし、実質動詞としてのモノスについての分類方法は主に文脈に依っており、不明確な点も残っている。例えば、東辻(1960)や近藤(1995)では、実質動詞としてのモノスの分類基準はいずれも示されていない。また、呉(2019)により、複合動詞の後項としてのモノスは、実質動詞の場合と補助動詞の場合両方ともあるため、『源氏物語』以外の複合動詞の後項としてのモノスの検討は不十分ではない。本稿は、以下、モノスの意味を、モノスが直前に取る補語句および文節の成分により分類して判断する。また、モノスを実質動詞(独立動詞用法と複合動詞後項の用法)、補助動詞(独立動詞用法と複合動詞後項の用法)という二種類に分けて考察する。また、複合動詞の後項としてのモノスには、呉(2019)の分類法に従い、分類を行う。各時代の使用テキスト、およびコーパス・データベースについては末尾の各項目を参照されたい。コーパスを中心とした調査は必ずしも十分ではないが、まずは史的変化の概要を把握したい。時代区分は『日本語学大辞典』により設定する。

## 3. 中古

中古におけるモノスの用例は全 877 例見られる<sup>iii</sup>。その内訳は、実質動詞用法が 571 例(複合動詞の後項は 28 例)、補助動詞用法は 306 例(複合動詞の後項は 2 例)である。

### 3. 1. 実質動詞

実質動詞としてのモノスは全用例数の65.1%を占め、具体的な共起要素を表1に示す。

表1 中古の実質動詞モノスに前接する要素

名詞句 277	意志を持つ動作主 80、意志を持つ動作対象 11、無意志対象物 83、移動の目的地や出発点 40、存在の場所 18、移動の目的 1、移動の手段 2、動作をする時点 22、動作をする場所 1、動作をする状態 16、連用修飾語「例の+ものす+場所」 3
動詞連用形句 51	無意志自動詞 8、意志自動詞 5、無意志他動詞 1、意志他動詞 37
形容詞連用形句 21	意志を持つ動作主の移動状態 11、意志を持つ動作主の存在状態 1、他の動作をする状態 9
形容動詞連用形句 9	意志を持つ動作主の移動状態 2、意志を持つ動作主の存在状態 1、他の動作をする状態 6
副詞句 125	状態副詞 71、指示副詞 28、陳述副詞 26
引用形式 51	…と(を、ばかり、のみ)43、…など 8
無し 9	
複合動詞の後項 28	-来 17、-行く 5、-ある 3、-言ふ 2、-なる 1

まず名詞句+モノスという形式のモノスは、いずれも実質動詞として使われる。モノスに前接する名詞句の構成により、モノスは様々の動作を代用する。例えば、(3)は((1)再掲)、「文」の内容である。無意志目的語「文」があり、後文脈の「返りごと書く」というところから、モノスは「書く」の意味である。

- (3) 文あり。「文ものすれど、返りごともなく、(略)」などぞあめる。これかれそそのかせば、返りごと書くほどに、日暮れぬ。(蜻蛉日記/中・200頁)

動詞連用形句+モノスの場合を見ると、無意志自動詞・意志自動詞・無意志他動詞・意志他動詞という四種類のいずれの動詞句とも共起する。ただし、意志的な動詞句との共起がもっとも多い(51例中42例)。例えば、(4)は、モノスが意志他動詞「忍ぶ」のテ形句に付き、移動の動作を表す。源氏が瘡病に悩んで、北山の寺にいる聖を訪れに行く場面である。前文脈に移動の目的地「北山になむ、なにがし寺といふ所」が示され、また「暁におはす」は、「暁に出かける」という移動の意味が読み取れる。無意志自動詞と共起する(5)は、かぐや姫の五人の求婚者が、いつものようにかぐや姫のところに集まってきた場面である。モノスは無意志自動詞「経」の連用形に助詞「て」が接続したものに後接するが、意志他動詞に後接する(5)同様、移動の意味を表す。

- (4) ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる。(略)」など聞こゆれば、(略)(源氏)「いかがはせむ。いと忍びてものせん」とのたまひて、御供に睦ましき四五人ばかりして、まだ暁におはす。(源氏物語/若紫・199頁)
- (5) 日暮るるほど、例の集りぬ。(略)翁、いでで、いはく、「かたじけなく、穢げなる所に、年月を経てものしたまふこと、きはまりたるかしこまり」と申す。

(竹取物語・23頁)

形容詞・形容動詞連用形句+モノスの場合は、動作主が何らかの動作をする時の状態を表すものである。(6)では動作主の「人」が「遠くものしぬべき」状態にある。また後文脈の「出で立つ日」や「ゆく人」というところから、「遠くものす」は「遠いところへ行く」と解釈できる。

- (6) かくて、あまたある中にも頼もしきものに思ふ人、この夏より遠くものしぬべきことのあるを、服果ててとありつれば、このごろ出で立ちなむとす。(略)いまはとて出で立つ日、渡りて見る。(略)ゆく人は二藍の小桂なり、とまるはただ薄物の赤朽葉を着たるを、脱ぎかへて別れぬ。  
(蜻蛉日記/上・138 頁)

副詞句の後に後接するモノスの用例もある。例えば(7)は、前文脈に「住み所」という場所名詞があり、モノスは打消・否定の副詞「え…ず」と共に使われ、その場所へ移動しないという動作を表す。

- (7) 文あり。あやしくめづらかなりと思ひて見れば、「(略)住み所、いと使なかめりしかば、えものせず。物詣では穢らひいできて、とどまりぬ」などぞある。  
(蜻蛉日記/中・225 頁)

表1の中にある引用形式というのは、(8)のような、具体的な話しや手紙の内容を引用し、「と言う」や「と書いている」の意として用いる用例である。「無し」というのは、(9)のような、モノスを修飾する語句がない、モノスの単独用法である。(9)は動作を行う場所は明示されないが、前文脈の「庭」「殿上の有様」「東宮」というところから、東宮のもとと推測できる。また「召しあれば、まゐりたまへり」というところから、モノスは移動の意を表し、発話者の東宮の立場から見ると、「来る」の意と考えられる。

- (8) 果つる夜しも門の音すれば、かうてなむ固うさしたるともものすれば、たふるるかたに立ち帰る音す。  
(蜻蛉日記/下・297 頁)
- (9) 庭の草もいと深く、殿上の有様も、東宮のおはしますとは見えず、(略)召しあれば、まゐりたまへり。「いと近く、こち」と仰せられて、「ものせらるることもなきに、(略)」と仰せられければ、  
(大鏡・133 頁)

なお、実質動詞用法であるモノスの中には、動詞連用形に付き、複合動詞の後項となっているものが28例ある。(10)の「のぼる」はグループⅢの「来」「行く」にも「ある」にも前接する動詞である。動作主の「むすめ」は「京に」移動する動作があり、発話者の兼盛の立場から見ると、「京に来る」ため、モノスは複合動詞の後項「-来」の敬語形と考えられる。(11)の「添ふ」はグループⅡの「ある」だけに前接する動詞である。「添ひものす」は「側に付いていて動かない」の意味で、モノスは「-ある」の敬語形と考えられる。

- (10) さて、この心かけしむすめ、こと男して、京にのぼりたりければ、聞きて、兼盛、のぼりものしたまふたるを告げたまはせで、といひたりければ、

(大和物語・291 頁)

- (11) 式部卿宮聞こしめして、「今は、しかいまめかしき人を渡してもてかしづかん片隅に、人わろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。(略)」とのたまひて、  
(源氏物語/真木柱・358 頁)

### 3. 2. 補助動詞

補助動詞のモノスの用例は以下のようなものがある。全用例の 34.9%を占める。

表 2 中古の補助動詞モノスの前接要素

断定助動詞ニ(係・副助詞・助詞「テ」 介在)+モノス 117	ものしたまふ 108、ものせらる 4、ものしはべる 2、ものせさせたまふ 2、ものしたる 1
形容詞連用形句+モノス 79	ものしたまふ 74、ものせらる 2、ものせさせたまふ 2、ものしはべる 1
形容動詞連用形句+モノス 35	ものしたまふ 30、ものせさせたまふ 3、ものする 1、ものす 1
動詞連用形句+モノス 71	ものしたまふ 60、ものす 4、ものせさせたまふ 2、ものせらる 2、ものしはべる 1、 ものしたる 1、ものする 1
副詞+モノス 2	ものしたまふ 2
複合動詞の後項 2	ものしたまふ 2

補助動詞としてのモノスは、ほぼ「ものしたまふ」という形で使われ、全 306 例のうち、90.2%を占める。「ものせさせたまふ」「ものせらる」などを併せると、敬語形が 9 割を超える。(12)では、鬚黒大将について紹介している。「年三十二三のほどにものしたまふ」は「年は三十二、三ぐらいでいらっしゃる」という意で、「に」は「年三十二三のほど」という状態を断定的に述べ、また、前文脈には鬚黒大将の顔を見て年を判断するといった状況がないため、モノスは補助動詞と判断できる。(13)は、後一条天皇(当時十歳)の将来について大変末遠いとする発話である。モノスは補助動詞として「遙か」という状態の持続を表す。(14)は、中村(1995)によれば、モノスが副詞「はなばなど」に付き、「これに陳述性を付与する用法で、「物し給ふ」の独立性は極めて稀薄である」と述べている。このような用例はもう一例あり、副詞「つくづくと」+モノスの用例である。

- (12) この大将(鬚黒大将)は、春宮の女御の御兄弟にぞおはしける。(略)年三十二三のほどにものしたまふ。  
(源氏物語/藤袴・343 頁)

- (13) 内の御ゆく末はいと遙かにものせさせたまふ。  
(大鏡・133 頁)

- (14) 新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり、はなばなともものしたまふ殿のやうにて、何ごともいまめかしうもてなしたまへり。

(源氏物語/花宴・363 頁)

### 3. 3. 中古についてのまとめ

中古のモノスは、全 877 例と非常に豊富な用例を示す。また、全 877 のうち、518 例は「ものしたまふ」の形で出現する。「ものしたまふ」518 例のうち、276 例が補助動詞用法

である。補助動詞用法のモノスは「ものしたまふ」という形で現れることが多いという点は、先行研究でも指摘されている(中村(1995)、近藤(1995))。

実質動詞としてのモノスは、様々な語と共起し、色々な意味の動詞の代用として用いられている。また、モノスの前接する要素は、モノスの意味を判断する基準となる。移動の目的地・出発点があれば、「移動」の意と判断でき、目的語名詞句があれば、他動詞として解釈できる。注目すべき点は、動詞連用形句との共起状況である。動詞連用形句が前接した 51 例のうち、42 例が意志的動詞連用形句と共起する(意志他動詞 37 例、意志自動詞 5 例)。これは、実質動詞としてのモノスが意志的な動作を表す傾向が強いということが分かる。全用例を見ると、近藤(1995)の述べるとおおり、移動する意を表す例が多く、ほかに、「文を書く」などの意を表す場合も、「他動性」「意志性」が伴う。「他動性」というのは、「参加者が二人(動作者と動作の対象)又はそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。(動作者と対象は無生物の場合もある。従って、二人でなく、二つの場合もある。)」(角田(2009)、p. 77)という性質である。他動性は、項名詞句の数や、変化の内容から判定する。「意志性」は「自分の意志で、その動作を行う」(角田(2009)、p. 86)という性質である。動作主が意志を持つかどうかで判定する。意志性が高く、一定の他動性のある動詞が多い点は、モノスの特徴として指摘できる<sup>iv</sup>。

無意志自動詞と共起する用例は 10 例あるが、いずれも、例えば(6)「例の集りぬ」のように、モノスが移動の意味であることを示す語句があり、モノスの意味が意志的な動作として解釈できる。

一方、補助動詞としてのモノスは、東辻(1960)で指摘されているとおおり、「属性を表わす語もしくは句」を接しやすい。具体的に、どのような属性を表わす語に接するかというと、まず、形容詞連用形句・形容動詞連用形句+モノスの場合は、人や物事の性質・状態を表す形容詞、形容動詞が現れる場合が多い(「幼し」「かうばし」「まめやか」「たひらか」など)。また、動詞連用形句+モノスの場合は、結果状態を表す動詞が現れる場合が多いという傾向が見られる(「痴る」「静まる」「おとなぶ」「沈む」など)。

## 4. 中世

中世におけるモノスの用例は 568 例を採取した。その内訳は、実質動詞用法 318 例(うち複合動詞の後項の例 30 例)、補助動詞用法 250 例である。以下中世前期と中世後期に分けて考察する。

### 4. 1. 中世前期

#### 4. 1. 1. 実質動詞

実質動詞としてのモノスは 291 例見られる。具体的な共起要素を表 3 に示す。

表 3 中世前期の実質動詞モノスの前接要素

名詞句 197	意志を持つ動作主 58、意志を持つ動作対象 7、無意志対象物 49、移動の目的地や出発点 22、存在の場所 29、動作をする時点 15、動作をする状態 17
動詞連用句 7	無意志自動詞 1、意志他動詞 6
形容詞連用句 6	移動・存在以外の動作をする状態 6
形容動詞連用句 4	移動・存在以外の動作をする状態 4
副詞句 56	状態副詞 32、指示副詞 15、陳述副詞 9
無し 3	
複合動詞の後項 18	-来 10、-行く 3、-ゐる 5

(15)は女二の宮と女三の宮の身分について紹介している。モノスは動作主の「女宮二所」の存在を表している。(16)は、「筑紫」という場所が提示され、後文脈の「出で立つ」という移動を表す語があるため、モノスは移動動作の「行く」を代用していると解釈できる。

(15) 御おぼえも重き方浅からぬが、女宮二所ものし給ふ。女二の宮は齋院にておはします。女三の宮は御身に添へきこえ給へり。  
(風に紅葉・25 頁)

(16) いとど心得ず思ふに、聞こゆるやう、「(略) 近きほどに筑紫へものせんと出で立ちたまふを、いと悲しうしたまひて、(略)」とて、  
(八重葎・76 頁)

(17)は、副詞+モノスの用例である。(17)は、世継がないということで、諸山諸寺で祈祷をしていたちょうどその折に、内侍の督の君が妊娠になったという場面である。モノスは「妊娠する」意として使われている。

(17) 儲けの君おはしまさぬころにて、山々寺々御祈りあるころ、かくものし給へば、限りなくおぼし喜びたり。大将殿も、男宮にておはしまさんを、今より面ただしくおぼすべし。  
(とりかへばや・282 頁)

複合動詞の後項としてのモノスの用例のうち、「-来」「-行く」の用例は 13 例、「-ゐる」の用例は 5 例見られる。(18)は一品宮が安産し、若君が生まれになった場面である。動詞「出づ」は、グループⅢの「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞である。若君は生まれてくるという移動の動作があり、モノスは複合動詞の後項「-来」と考えられる。(19)は、中納言が四の君の安産のため、四の君に付き添っているという場面である。動詞「添ふ」はグループⅡの「ゐる」にだけ前接する動詞である。動作主の中納言が「添ふ」という動作をした後じっとしているため、モノスは複合動詞の後項「-ゐる」と考える。

(18) 二十日余りのほどに、いと平らかに、若君の世に知らぬにて出でものし給へる御心ちども、言へばえなり。  
(恋路ゆかしき大将・108 頁)

(19) いと忍びて人召して、御祈りはじむべき事、心の限りのたまひなどして、添ひものし給ふ。  
(とりかへばや・165 頁)



#### 4. 1. 2. 補助動詞

次に、補助動詞としてのモノスの用例は 223 例見られる。補助動詞モノスの前接要素を表 4 にまとめる。

表 4 中世前期の補助動詞モノスの前接要素

断定助動詞二(係・副助詞・助詞「テ」介在)+モノス 94	ものしたまふ 86、ものせさせたまふ 6、ものせらる 1、ものせまほし 1
形容詞連用句+モノス 61	ものしたまふ 53、ものせさせたまふ 7、ものしはべる 1
形容動詞連用句+モノス 30	ものしたまふ 26、ものせさせたまふ 3、ものしはべる 1
動詞連用句+モノス 37	ものしたまふ 34、ものせさせたまふ 2、ものしはべる 1
副詞+モノス 1	ものしたまふ 1

表 4 で見るように、補助動詞としてのモノスは中古と同じ、ほぼ「ものしたまふ」という形で使われ、全 223 例のうち、89.7%を占める。また、補助動詞としてのモノスはすべて敬語形として用いられている。具体的な用例を挙げてみる。(20)は、断定の助動詞「に」にモノスが付き、「大君は帝の後で、東宮の母君でいらっしゃる」という意を表し、補助動詞用法である。(21)は、兵部卿の宮は姫君が幼い時に遊びながらお互い好意を持つようになったことを言う場面で、モノスは「幼い」という状態の持続を表すものである。(22)のモノスは「生き出で」という状態が保持されていることを表すものである。

(20) 御兄の関白殿は姫君二人、男三人持ち奉り給ひければ、いとあらまほしく、大君は当帝の後にて、春宮の御母にもものし給ふ。(石清水物語・11 頁)

(21) 互に幼くものし給ひしほど何となく遊び給ひつつ過ぎ給ひしに、やうやう御心のつくままに、(苔の衣/冬・208 頁)

(22) 「…『今日も暮れぬ』とあはれにおぼしつづけて、生き出でてもものしたまはましかば、などあるところ。…」(無名草子・212 頁)

#### 4. 2. 中世後期

中世後期においては、モノスの用例は 53 例を採取した。実質動詞用法が 27 例(複合動詞の後項 12 例)、補助動詞用法が 26 例である。

##### 4. 2. 1. 実質動詞

実質動詞であるモノスとの共起要素を表 5 に示す。

表 5 中世後期の実質動詞モノスの前接要素

名詞句 8	意志を持つ動作主 4、無意志対象物 2、移動の目的地 1、存在の場所 1
形容詞連用句 1	移動・存在以外の動作をする状態 1
副詞句 6	状態副詞 4、指示副詞 2
複合動詞の後項 12	-来 11、-行く 1

以下用例を挙げる。(23)は、場所を表す名詞「かしこ」が提示され、モノスはその場所に動作主が存在することを表わす。(24)は、大納言の典侍、中納言の典侍、帥の典侍が懐妊したという場面で、モノスは「妊娠する」という意を表す。(25)は「この姫君の兄はたくさんいる」という意で、モノスは副詞「あまた」と共起し、人の存在を表している。

(23) 踐祚の御使ひの宮こに参らんと同じやうに上らんとて、いまだかしこにもものせられつるに、かくあやなきことの出で來ぬれば、いみじともさらなり。

(増鏡・460 頁)

(24) 九條殿の北政所、又梨本・青蓮院法親王など大納言の典侍の御腹、昭慶門院中納言の典侍、十樂院慈道法親王は帥の典侍殿の腹、かやうにすべて多く物し給。

(増鏡・360 頁)

(25) 此姫君の御兄あまたものし給中のこのかみにて、中納言公宗ときこゆる、

(増鏡・320 頁)

複合動詞の後項と考えるモノスは 12 例ある。(26)の動詞「出づ」はグループⅢの「来」「行く」にも「ある」にも前接する動詞であり、子が腹から出てくるという移動の動作があるため、モノスは複合動詞の後項「-来」の敬語形だと考えられる。

(26) 御覽じけるほどに、その御腹に出で物し給へりしかど、當代生させ給にし後は、をし消たれてをはしますに、

(増鏡・307 頁)

#### 4. 2. 2. 補助動詞

補助動詞としてのモノスの用例は 26 例採取された。前接要素を表 6 に示す。

表 6 中世後期の補助動詞モノスの前接要素

断定助動詞二(係・副助詞・助詞「テ」介在)+モノス 9	ものしたまふ 9
形容詞連用句+モノス 11	ものしたまふ 11
形容動詞連用句+モノス 2	ものしたまふ 2
動詞連用句+モノス 4	ものしたまふ 4

補助動詞としてのモノスは、中世後期になると、すべて「ものしたまふ」という敬語形式で使われる。(27)は「四十一でいらっしゃる」という状態を断定し、係助詞「ぞ」が断定の助動詞「に」とモノスの間に介し、モノスは補助動詞として用いられている。(28)は、若宮が若いうちに遠い国へ移してほしいという場面で、モノスは「幼う」という状態の持続を表す。(29)は入道殿が故大臣のことを思って落ち込んでいる場面である。モノスは無意志自動詞「沈む」という状態の持続を表す。

(27) しばしは禪僧にならせ給とて、緑衫の御衣に掛絡といふ袈裟かけさせ給へり。四十一にぞものし給ける。御法名金剛覺と申なり。

(増鏡・388 頁)

(28) 幼うものし給へば、遠き國までは移し奉らねど、もとの御後見をばあらためて、西園寺の大納言公宗の家にぞ渡したてまつる。

(増鏡・467 頁)

- (29) かく花やかなるにつけても、入道殿はめざましく思さる。故大臣の先だち給し歎きに沈みてのみ物し給へど、「かゝる世の氣色を、かしく見給はぬよ」と思しなぐさむ。  
(増鏡・333 頁)

#### 4. 3. 中世についてのまとめ

中世におけるモノスも多用されるが、ほとんどの用例は中世王朝物語と歴史物語で使われている。実質動詞より補助動詞の使用数は少ないが、それほどの差がない。

実質動詞としてのモノスの前接句を見ると、中世前期から引用形式がなくなっている。つまり引用形式は中古特有の用法である。しかも、『蜻蛉日記』における特有の用法であり(全 51 例中 45 例)、作品の個性である可能性もある。動詞連用句との共起を見ると、やはり意志他動詞と共に使われやすい(全 7 例中 6 例)。補助動詞としてのモノスは、副詞句に後接する例のうち、陳述性を付与する用法がみられなくなった。形容詞・形容動詞句の用例は中古と同じく、人や物事の性質・状態を表す形容詞、形容動詞句が現れやすい。動詞連用句の用例は、無意志自動詞の動作持続を表す傾向が見られる(全 41 例中 32 例)。また、中世前期には「ものせさせたまふ」や「ものしはべる」、「ものせらる」の出現形で補助動詞としても使われていたが、中世後期になると「ものしたまふ」の出現形のみが残る。

### 5. 近世

近世におけるモノスは 161 例を採取した<sup>v</sup>。その内訳は、実質動詞用法が 159 例、補助動詞用法が 2 例である。全体的に、モノスの補助動詞用法の割合が大幅に減少していることがわかる。

#### 5. 1. 実質動詞

実質動詞としてのモノスの共起要素を見ると、表 7 に示すように、名詞と共起する用例の割合が増えており、無意志対象物が目的語となる用例が多くなっている。

表 7 近世の実質動詞モノスの前接要素

名詞句 91	無意志対象物 50、意志を持つ動作主 4、移動の目的地 7、存在の場所 3、移動の目的 4、移動の手段 1、動作をする場所 6、動作をする状態 14、動作をする時点 2
動詞連用形句 13	無意志自動詞 1、意志自動詞 2、意志他動詞 10
形容詞連用形句 17	移動・存在以外の動作をする状態 17
形容動詞連用形句 12	移動・存在以外の動作をする状態 12
副詞句 18	状態副詞 14、指示副詞 1、陳述副詞 3
無し 3	
複合動詞の後項 5	-来 2、-みる 3

具体的な用例を見る。(30)と(31)は名詞句と共起する用例である。(30)は、盆九が罪を自白している場面である。直接目的語「金銀」が示され、「家内に潜入りて」から、モノ

スは「盗む」という意と解釈できる。(31)は、直接目的語「料紙、硯の箱」が明示され、川の底に埋もれた木を掘り出して料紙、硯の箱を作るという意で、モノスは「作る・仕立てる」の意として用いられている。(32)は、形容詞連用形と共起する用例である。モノスは「箭五郎」を動作主とする実質動詞で「用意する」「調える」の意と解釈できる。

- (30) 「(略)密やかに相譚ふやう、『(略)今宵家内に潜入りて、咱はある涯りの金銀をものせん。(略)』と憑れしより心惑ひて、俱に納戸に潜入りて、朱之介は那這と、撈りて財囊を引出し、(略)」といふ、 (近世説美少年録(3)・102 頁)
- (31) 「(略)多くの人夫して、名取河の水底を浚せ、よかくして埋れ木を掘りもとめて料紙、硯の箱にものし、それに宮城野の萩の軸つけたる筆を添へて、二条家へまゐらせられたり。(略)」とてたびぬ。 (近世俳文集・530 頁)
- (32) その折々に箭五郎は、捷軍の歎びなりとて、酒殺美々しくものして、朱之介を管待しつ、その身も飽まで飲啖ひたる、 (近世説美少年録(2)・89 頁)

複合動詞の後項としてのモノスは5例見られる。(33)の「立つ」はグループⅢの「来」「行く」にも「ある」にも前接する動詞であり、動作主は弁天さまの前に立っており、動きがなく、じっとして願っているため、モノスは「-ある」の敬語形として考えられる。

- (33) 私はいゝなづけのお方の為に、神さんへ願をかけ、弁天さまへ立ものして、男の手にもさはるまひ、三年の内は恋しひ人に、めぐり逢ても一所へは寄ますまいからどふぞして、尋ねあはしてくださいましと、誓ひをたてゝ深いねがひ。 (人情本/春色梅兒譽美・70 頁)

## 5. 2. 補助動詞

補助動詞としてのモノスは僅か2例である。いずれも状態・様子を表す形容詞の状態持続を表すものである。(34)のモノスは「用心深く」という状態を表している。

- (34) 「(略)薄情や日属は万のうへに、用心深くものし給ひし、大人の氣質に似げもなく、冤屈の縲綯を積くよしも、あらずなりしは這家の、滅却ぬる時節歎」と口説立つゝうち歎くを、 (近世説美少年録(2)・217 頁)

## 5. 3. 近世のまとめ

近世期以降、実質動詞としてのモノスの「他動性」「意志性」はそれ以前より強くなっている。(31)のような、「AをBにV」という強い意志他動詞用法が近世から現れる。また(30)のような、「盗む」という意志性が強い動作を表し、その「盗む」の動作の結果として対象物(目的語)が実際に手に入ったという結果性も顕著である。

補助動詞用法の割合が近世から顕著に低くなる原因を考えて見ると、モノスの「他動性」「意志性」が強くなり、実質動詞としての使用が増えている点が一因と考える。もう一つの原因は、「たまふ」自体の使用が減少していると考えられる。中世期までのモノスの補助動

詞用法は、前述したように、主に「ものしたまふ」「ものせさせたまふ」「ものせらる」などの敬語形で用いられ、中世後期には「ものしたまふ」へ収束していた。しかし中世後期以降は、「ものしたまふ」という形で現れる用例がほぼない。「ものしたまふ」という敬語形式の使用自体も減少し、補助動詞としての「ものしたまふ」はさらに少ない。また、文体ごとに異なる使用により、補助動詞用法が減少するののも一つの原因だと考える。作品別に見ると、補助動詞用法は、ほぼ貴族社会を中心として書かれた中古の物語類、中世の王朝物語及び歴史物語に限られている。和歌と軍記物語には用例が見られず、洒落本や読本などにも少数である。これは、直接的な表現を避けたいときに、あえてモノスを用いたり、「ものしたまふ」や「ものせさせたまふ」などの敬語形式が多用されたりする王朝物語・和文の特性と考えられてきた（高橋(2010)）。しかし近世以降のモノスは「他動性」、「意志性」がより顕著となり、王朝物語をはじめとした擬古的な和文の運用に矛盾する。文体差によるモノスの使用の様相は今後また詳しく考察する必要があると考える。

## 6. 近現代

近現代における用例は125例を採取した<sup>vi</sup>。採取した用例のうち、補助動詞としての用例は1例に留まり、しかも古文の引用である。(35)は、モノスは断定の助動詞「に」に接し、「西四条の前齋宮はまだ御子でいらっしゃる時」という意である。この1例以外のモノスは全て実質動詞用法である。近現代以降補助動詞用法は事実上なくなったと言える。

(35) 後撰集卷十三恋五の部には、宮が齋宮にならせられて伊勢へお下りになった時の  
敦忠の歌が、次のような詞書と共に載っている——西四条の前齋宮まだみこにも  
のし給ひし時心ざしありて思ふこと侍りける間に、

(谷崎潤一郎・『少将滋幹の母』)

実質動詞としてのモノスを見ると、124例中、104例は名詞句に後接する用例である。また、複合動詞の後項としてのモノスの用法は見当たらない。

表8 近現代の実質動詞モノスの前接要素

名詞句 104	無意志対象物 81、意志を持つ動作対象 4、動作をする人 12、動作をする状態 2、動作をする場所 1、移動する手段 1、移動する目的地 1、移動する目的 1、動作をする時点 1
動詞連用句 6	意志他動詞 4、意志自動詞 1、無意志移動し 1
形容詞連用句 3	移動・存在以外の動作をする状態 3
形容動詞連用句 2	移動・存在以外の動作をする状態 2
副詞句 7	状態副詞 7
無し 2	

表8からわかるように、モノスと共起するのは名詞句がほとんどであり、具体的な対象物に対し何らかの動作をする用例が顕著に増えている。明治以降の用例は、(36)のような、ヲ格を取る用例が66例あり、いずれも動作の直接目的語が明示され、「作品を作る・完成

する」の意として用いられている。直接目的語は小説・作品・絵・詩などの文芸関係の例がほとんどである。また (37) のように、「人 {の/が} ものした X」の連体修飾節の中で用いられ、「文書・文献・著作を書く」「作品を作る・完成する」の意で用いられる例が 22 例見られる。中世以前のモノスとの大きな違いは、中古・中世の移動動作・言語活動より、結果性が強く、具体的な結果物(作品、小説など)があるという点である。このような用例は明治以降のモノスの主要な用法となっており、現在はこの用法のみが残っている。

(36) 「(略)すべて女性の保護と慰藉のおかげで、数多い傑作をものしたのだそうです。  
(略)」 (太宰治・『恥』1975)

(37) すべて、芸術というものは、自分のものした芸術に、自分で惚れ出したらもうお  
しまいです。 (中里介山・『大菩薩峠 37 恐山の巻』1976)

## 7. まとめ

本稿は中世から近現代までのモノスにおける実質動詞用法と補助動詞用法の歴史的変化について考察した。その変化の様子について表 9 にまとめる。

表 9 モノスの実質動詞用法・補助動詞用法の割合の変化

	実質動詞 (複合動詞の後項)	補助動詞 (複合動詞の後項)	実質動詞の前接要素の割合						
			名詞句	動詞句	形容詞句	形容動詞句	副詞句	引用句	無し
中古	65.1% (3.2%)	34.9% (0.2%)	48.5%	8.9%	3.7%	1.6%	19.8%	8.9%	1.6%
中世前期	56.4% (5.2%)	43.6%	67.7%	2.4%	2.0%	1.4%	19.2%	-	1.0%
中世後期	50.9% (44.4%)	49.1%	29.6%	-	3.7%	-	22.2%	-	-
近世	98.8% (3.1%)	1.2%	57.2%	8.2%	10.7%	7.5%	11.3%	-	1.9%
近現代	99.2% (-)	0.8%	83.9%	4.8%	2.4%	1.6%	5.6%		1.6%

表 9 からわかるように、モノスの実質動詞用法は中古と中世には補助動詞用法より多く使用されるが、それほどの優勢を得られなかった。しかし近世に入ると、実質動詞用法の割合が顕著に増え、近現代にはほぼ実質動詞用法だけが残るようになる。また、実質動詞としてのモノスの共起状況を見ると、名詞句と共起するものが増え続ける。しかも、用例を見ると、中古・中世には人の存在・移動や物事存在など、自動的な意を表すものが多いが、近世以降には、具体的な物に対し「盗む」「作る」といった何らかの動作をして、目に見える変化が起こる実質的な用例が増え、近現代にはそのような用例だけが存続する。これはモノスの他動性が強くなり、動作の結果として結果物が残っているという変化が現れ、モノスは他動詞化していると位置づけられると考える。

古来、モノスには、自動詞用法と他動詞用法の双方が認められるが、中世後期までにおけるモノスの他動詞用法は、他動性が弱く、あくまで「手紙を書く」や「話をする」という言語活動として用いられており、動作の対象物に変化を起こす用例も少ない。しかし近世に入ると、(31)のような他動性が強い用法が現れ、対象物に目に見える性質・状態変化を起こす用例が増えている。モノスの自動詞用法と他動詞用法の使用状況について考察す

る必要があると考える。

また、前述したように、モノスの使用は、作品別・文体別にも、大きな差が見られる。まず地の文と会話文の使い分けから見ると、中古や中世王朝物語では、会話文での使用が地の文より多いと言われる<sup>vii</sup>。しかし明治以降になると、会話文での使用がほぼ見られず、小説、雑誌など、文芸作品の地の文での使用がほとんどとなる。ジャンルから見ると、先行研究では、和歌での使用が見られず、中古には物語類と日記類で多用されているとの指摘がある。今回の調査でも、中世にはほとんどの用例が王朝物語に現れ、擬古文や説話集などでの使用例も少数見られるが、軍記物語での使用は全くなかった。近世には、初期は「仮名草子」や「浮世草子」などに用例がよく現れ、後期は読本での用例が多く現れる。明治以降はほぼ小説と雑誌に限られている。文体史という観点からモノスの歴史的変化を見る必要があり、今後も調査範囲を拡大しながら検証していく必要があると考える。

## 注

<sup>i</sup> モノスの実質動詞用法と補助動詞用法に関する先行研究だけを取り上げる。

<sup>ii</sup> 存在を表すものと補助動詞であるもの両方を含む。

<sup>iii</sup> 中古・中世の用例採取は、国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン2020.03、中納言バージョン2.5.2、最終閲覧日2020年07月20日)、Japan Knowledge Lib(「新編古典文学全集」個別検索)、国文学研究資料館(日本古典文学大系本文データベース)、『中世王朝物語全集』(笠間書院)を使用し、を、観察を行った。

<sup>iv</sup> 移動の意を表す以外には、モノスの目的語により判断した。「もの」「魚」「破子」などを「食べる」という意を表す用例は8例、「消息」「文」「返りごと」などを「送る・出す・あげる・持つ」という意を表す用例は17例、発話・手紙・心内文の引用し、「言う・思う・書く」や、「返りごと」「文」「こと」などを「書く・言う・思う」の意を表す用例は87例、「手水」「湯」を「使う」という意を表す用例は3例、「節供」を「用意する」という意を表す用例は1例である。

<sup>v</sup> 近世の用例採取は、旧版『日本古典文学大系』(岩波書店)、国立国語研究所(村山実和子ほか)編(2020)『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』(バージョン2020.03、中納言バージョン2.5.2、最終閲覧日2020年08月23日)、Japan Knowledge Lib(新編古典文学全集個別検索)、国文学研究資料館(断本大系本文データベース)を使用し、底本の『新編古典文学全集』(小学館)、『断本大系』(東京堂出版)を対照しながら観察を行った。

<sup>vi</sup> 近・現代の用例は、国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン2020.03、中納言バージョン2.5.2、最終閲覧日2020年08月23日)、見出し語検索NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search/>)、日本語用例検索・青空文庫所収文学作品 (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>) を用いて採取した。

<sup>vii</sup> 中村(1995)。

## 参考文献

小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

角田太作(2009)『世界の言語と日本語(改訂版)言語類型論から見た日本語』くろしお出版

近藤明日子(1995)「「ものす」攷」『学習院大学国語国文学会誌』(38), pp12-29

呉寧真(2019)「動詞連用形に後接する「ものす」」国学院大学大学院紀要・文学研究科(50), pp.19-33

- 高橋良久(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせた  
まふ」『日本語学最前線』和泉書院, pp. 325-344
- 中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院, pp. 37-49
- 東辻保和(1960)「「ものす」考」『論究日本文学』(12) pp28-35
- 『日本国語大辞典 第二版』(2000) 小学館
- 『日本語学大辞典』(2018)日本語学会編, 東京堂出版

### 使用テキスト

【中古】『新編日本古典文学全集』(小学館)竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記／旧版『日本古典文学大系』(岩波書店)今鏡、篁物語 【中世】『中世王朝物語全集』: あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨、苔の衣、恋路ゆかしき大将/山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる/住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語、風に紅葉/むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)、我が身にたどる姫君(下)／『新編日本古典文学全集』(小学館): 無名草子、保元物語、平治物語、閑吟集、新古今和歌集、方丈記、徒然草、正法眼蔵随聞記、歎異抄、平家物語、建礼門院右京大夫集、中世日記紀行集、中世和歌集、宇治拾遺物語、十訓抄、沙石集、曾我物語、太平記、謡曲集、狂言集、連歌集、義経集、室町物語草子集、連歌論集、能楽論集／『日本古典文学大系』: 福富長者物語、篁物語、古今著聞集、神皇正統記増鏡、謡曲集 【近世】『洒落本大成』／『新日本古典文学全集』(小学館): 好色一代男、好色一代女、好色五人女、男色大鑑、近世俳句集、松尾芭蕉集、近世俳文集、仮名草子集、東海道中膝栗毛、近世説美少年録、西山物語、雨月物語／『断本大系』(東京堂出版): 昨日は今日の物語、狂哥咄、千里の翅、白癡物語、立春断大集、戯言養気集、軽口筆彦断、会席断袋、宇喜蔵主古今咄揃、正直咄大鑑、軽口星鉄炮、あごの掛金、落咄懸鎖、杉楊子、初音草断大鑑、臍が茶、新選勧進話、臍の宿かえ、はなしのいけす、落断常々草

### 使用コーパス・データベース

- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)
- 国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2020.03, 中納言バージョン 2.5.2) (最終閲覧日 2020年7月30日)
- 日本古典文学大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>)
- 断本大系本文データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>)
- 見出し語検索 NINJAL-LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search/>)
- 全文検索システム『ひまわり』日本語用例検索・青空文庫所収文学作品
- \*本稿は中国国家留学基金(201908050116)の助成を受けたものである。